中国国境付近における対外開放と地域協力の実態

薛　軍

はじめに

初めまして、薛と申します。よろしくお願いします。

今日は、「中国国境付近における対外開放と地域協力の実態」について報告させていただきます。

これまで六年間、中国の辺境あたりをいろいろ回りました。「辺境」というのは中国語で、日本語では「国境」を意味します。中国は国境線が長く、二・二万キロあります。この長い国境線に沿って一四カ国と接しています。

私はよく「旅行調査」といわれますが、決して風景がいいところだけではなく、危険なところや不愉快なところもあり、大変でした。一番不愉快だったのはロシアと接する綏芬河です。後ほど、ケーススタディーのところで紹介します。あそこの国境線を越えるとき、私のビザに問題があるとかいわれ、入管のホールで三〇分以上待たされました。ビザはロシアの大使館が出したものじゃないかといったのですが、何の説明もないというよ

うなことがありました。

一番危険なところはミャンマーです。内戦が終わったばかりのときだったんですけれども、中国人のマフィアがいて詐欺を働いていたんですが、私が乗らないので最後はあきらめたようです。後で思い出したら怖かったです。

今まで一番驚いたのはベトナムと接するところです。泊まったホテルから密輸の場面を見ました。これは予想外で、一晩眠れませんでした。ベトナムと中国の国境には一つ川がありまして、夜になると川のあたりがうるさい。窓からのぞいたら、一方は軽工業品を持っていて、一方は食品など農産物を持っていて、物々交換をしていましたが、実は関税は一切払っていません。密輸です。翌日、地元の知り合いを訪ねていって聞いたら、時期による、それは平気ですと。十数年前、バイクとか日本の中古車を密輸しているということがあった。夜になると、仮設の橋をつくって、一二〇キロ以上のスピードでベトナムから中国に飛んでくるんです。

そこで私が考えたのは、自由貿易です。自由貿易というのは自発的に民間で起きたものなんです。日本は島国で、周りは海です。中国は陸と陸がつながっているので、国境あたりの民族は、家族は半々で分けられているかもしれませんが、もともと歴史上は同じです。そういうことで、民間の取引については、関税とか、国のルールに沿ってやりたくないということがあります。まず自由貿易ゾーンをつくって、さらに、現場の事情に合わせて国のルールをちゃんとつくればＦＴＡになるんです。現在、日本はＴＰＰ参加について論議していますが、ベトナムとの国境あたりの経験から、自由貿易ゾーンの原点はそこではないかと私は思いました。

昔の辺境地域で、今は国境ではないところですが、雲南省の世界遺産・麗江の豊かさには驚きました。かつて地元ナシ族の王が住んでいる家に最初に入ったとき、北京の頤和園にそっくりだと思いました。当時、人口は七万しかいませんでした。ナシ族は商売の民族といわれ、昔はチベットにお茶を持っていって、向こうからは漢方薬などを運んで来ていました。日本のテレビでも報道されたことがありますが、「茶馬古道」、もう一つのシルクロードといわれる昔の物流のルートです。あそこで代々蓄積したお金でああいうすばらしい家をつくったようです。

このように、中国は広く、過去から現在までに至るつながりがあります。今日は、そのつながりではなく、今日とこれからの経済発展のパターンをお話ししたいと考えています。

今日の内容は三つに分けられます。一つ目は、中国の辺境（国境）経済開発の概況です。二番目は、辺境（国境）経済開発における三つの局面、存在効果・展開効果・拡散効果です。中国が改革開放直後に出している政策は沿岸部です。特区をつくったり、開発区があったり、保税区があったり、皆さんもご存じだと思います。大連も、広州も、北京も、上海も、ほぼ同じパターンです。では、辺境（国境）あたりはどうなのか。実は一緒です。辺境あたりの改革開放の進捗度を三つの局面に分けてまとめましたので、それを二番目に紹介します。

三番目は、辺境（国境）貿易から見た人民元の国際化です。以前、大和総研の川村専務理事に、人民元の国際化について、辺境からスタートしてぜひ研究してほしいといわれたんですけれども、どうも最近の状況を見ると、辺境貿易による人民

元の国際化の時代は終わっているようです。今の段階は、中央政府主導でいろんな方面に展開していると思います。

一、中国の辺境（国境）経済開発

(1) 概観

①沿岸地区　VS　沿辺地区

最近、皆さんは「内需拡大」という言葉をよく耳にすると思います。要は、内陸部の消費の需要を喚起することです。では、内陸部とはどこなのか。鄧小平の三〇年前からの改革開放は、まず沿海部からスタートしました。深圳、汕頭など四つの経済特区をつくりました。それから、一二の経済開発区をつくりました。上から大連、天津、上海、寧波、福州、廈門などです。その後、保税区をつくりました。このようにして、まず沿岸部の開放をしました。

海に面しているところから中に行くと内陸といいます。行けば行くほど内陸ということで、西部になります。アジア通貨危機以後、二〇〇〇年に中国政府は西部大開発という戦略を出しました。中国に詳しい人は多分覚えていると思います。西部開発ということは辺境も含まれています。ところが、一つ注意しなければいけないことがあります。中国は大きいです。三二の省があり、その首都、例えば河北省なら石家庄、四川省なら成都、湖北省なら武漢ですが、そこは大都会です。中国人は、そこを内陸とはいいません。省の首都の周辺のところを内陸といいます。要は未発達のところです。

②瑷琿―騰沖人口地理分界線

本日の配布資料（本文末参照）の五頁の地図を

見てください。点線があります。この点線は「人口地理分界線」といいます。一九三五年、胡氏という学者が提出した理論です。この線の東南部に人口の九四％が集中し、面積は全国面積の四三％です。この線の上、西北あたりは、五七％の面積を占めているんですが、人口はわずか五・七％です。少数民族が集中する辺境地域です。昔の中国は、基本的にこの線に沿って分析していました。

話をまとめると、沿岸地域と沿辺地域はどう違うのか。先ほど紹介したとおり、鄧小平はまず東部の沿岸部から改革開放を開始し、その後、西部の内陸に展開していきました。それに対し、内陸にある辺境地域を「沿辺地域」と呼びます。

③九〇年代からスタート

一九九〇年代、沿岸地域から一〇年おくれて沿辺地域の開放がスタートしました。一九九二年の鄧小平南方講話とほぼ同時に、中国政府は全国の沿辺地域、すなわち辺境の七省あるいは民族地域、一三の辺境町、合わせて二三二カ所の口岸を開放しました。「口岸」とは、日本でいう税関、通商窓口のことです。

同時に、中国政府は、沿岸部にある経済開発区のモデルを参考にして、一三の口岸都市に合計一三の辺境経済合作区をつくりました。沿海部分は開発区、沿辺部分は辺境経済合作区ですが、同じものです。後ほど発展開発モデルで紹介します。

④沿岸部と比較した場合の主な特徴

では、沿岸部と比較して辺境あたりはどう違うのか。沿岸部の対外経済開放は、主に輸出主導による労働集約的な加工貿易生産基地を東部沿海側に建設することです。外資系企業にとっては海外生産輸出拠点です。それに対して、沿辺部の経済

開発とは、主に輸出主導による辺境貿易拠点・物流基地を国境線の中国側に建設することです。したがって主に、生産拠点と物流拠点という点が異なります。

(2) 辺境・国ゲート・「界碑」

①辺境

辺境は国境ともいいます。国と国の間の境です。中国は非常に広くて、辺境線（国境線）も非常に長く、二・二万キロあります。そして、一四の国と接しています。北朝鮮、ロシア、モンゴル、カザフスタン、キルギスタン、インド、ブータン、ミャンマー、ベトナム、ラオスなどです。

全中国三二の省レベルの行政区の中に九つの自治区がこの二・二万キロの長い国境線に沿って立地し、同時に、その管轄内に一三五の県があり、人口は二二〇〇万人以上に上ります。

②国ゲート・「界碑」

現在、中国と隣国との間には、インドとの一部を除いて陸上での国境線が明確に画定されています。私が一番関心を持っているのはロシアとの紛争をなくすことです。昔、ロシアとの関係は戦争までいっていましたが、つい最近、陸上での国境線がはっきりしましたので、これから将来、戦争の原因にはならないと思います。海は、南シナ海の問題とかいろいろありますが、陸上においては、インド以外ははっきりしています。国境線での紛争が一番難しいので、このことはよかったと思っています。あとは海上での国境線の解決ですね。

その重要なスポットには、人や貨物などが出入りする国のゲートがあります。要は国門です。資料の九頁の写真を見てください。ミャンマーとの間の国境線に建てられた門です。この門の何十

メートルか離れた後ろにミャンマーの国門があります。ミャンマーの文字が書いてあります。横から見ると、中国の門とミャンマーの門、二つの門があります。

この門は普通、国境あたりに住んでいる人が出入りする門です。私は三〇分ほど見ていたのですが、パスポートや通過証のようなものはどうも要らないようです。友人の一人は勝手にミャンマーに入ったのですが、全く何もありませんでした。私たちが通過するのは別の正式なところです。二・二万キロという長い国境線なので、フェンスがあるところはわずかです。道路から少し外れたところはフェンスなどありません。ということで、地元の人に聞いたら、自由貿易と密輸の差はないということでした。関税を払わないときは自由貿易ということです。

中国とロシアの辺境線における界碑です。（資料一〇頁）私がこの写真を撮ったとき、中国からロシアに向かう石油タンクの列車がちょうど通過しているところでした。これはロシア側のゲートです。中国の領土はここまでで、向こうからがロシアの領土です。間は何十メートルかあいています。

中国と周辺国の一部との間には、通常の辺境住民はもちろん、一般の旅行者でもパスポートが要らない場合もあります。

この写真（資料一二頁）はパスポートではありません。ミャンマーに行くとき、地元の公安局に行って、向こうに旅行に行きたいと申請したらこういうものをつくってくれました。三〇分もかからなかったと思います。

(3) 辺境と民族

二・二万キロという長い国境線のうち、一・九

万キロ、すなわち八六・四％の部分が少数民族の地域です。また、そのうち三〇以上の民族は隣の国の民族と同一民族です。よって、それらの辺境住民は国籍だけが違い、辺境線があるにもかかわらず、生活習慣や言葉、宗教などはほぼ一致し、一部には親戚関係もあります。

この写真（資料一三頁）はベトナムとの国境貿易拠点で撮った労働者です。中国チワン族の女性です。

現在、二・二万キロといわれる長い辺境線に、九つの省、一三五の県があり、そのうち民族自治県は一〇七あります。また、全中国で少数民族の数は五六ありますが、そのうちの大半が辺境あたりに暮らしています。これは辺境全人口の半分近くに達しています。こういう特徴があります。

(4) 辺境線に点在する互市（貿易）

次に、辺境線に点在する互市、すなわち貿易拠点です。

「互市」は中国語ですが、「市場（イチバ）」の意味で、昔から存在しています。もともと辺境住民たちが自発的に設けた商品交換の場からスタートしたものだろうといわれています。

現在、中国の互市は、歴史的、伝統的な市場が多いです。その互市での取引は「互市貿易」ともいえます。辺境住民たちによる隣の国の住民たちとの間の貿易活動を指しています。今、中国政府はきちんと政策をつくっています。中国政府の規定による陸上ボーダーの領域は、一九九六年以前は一五キロでしたが、今現在は二〇キロです。要は、国境線二〇キロ以内に政府承認済みで開いたスポット、または指定される市場です。その中での貿易活動は、一定の金額または数量が制限され

る商品交換の活動です。すなわち、一定の貿易量、金額内で交換すれば密輸ではありません。法律上認められています。

この写真（資料一八頁）はベトナムと隣接する互市です。非常に立派な建物です。現地の人に聞いたら、浙江省のお金でつくられたそうです。浙江省は中国の沿岸部、上海の隣です。

先ほど貿易活動には金額の制限があるといいましたが、一九九六年の規定では、一人一日当たりに持ち込まれる商品の価値が五〇〇〇元を超える場合には税関の手続が要ります。二〇〇八年一一月、つまり金融危機の後ですが、免税ラインを五〇〇〇元から八〇〇〇元までアップさせました。

互市に参加するプレーヤーについても明記されています。参加主体は国境両側の住民で、互市に進出する店や企業などは辺境貿易の取り扱い対象になります。

(5) 辺境貿易

次に、辺境貿易です。

辺境貿易は「国境貿易」ともいいます。文字どおりに理解すれば、隣接する両国の間の貿易です。中国国内では、辺境あたりの一定の地域範囲の中で、辺境住民または企業と、その隣国の住民または企業との間の貿易活動を指しています。

この図（資料二一頁）を見てください。辺境貿易には三つの内容が含まれています。一つは、互市貿易。もう一つは、辺境小額貿易。さらに、辺境地域対外経済技術合作です。ちなみに、毎年出されている中国の国の統計年鑑には辺境貿易の統計は入っていません。ところが、辺境地域を持っている九つの省レベルの自治体の統計年鑑の中には辺境貿易の数字は入っています。

これは辺境小額貿易と辺境地区対外経済技術合作の内容ですが、時間の都合上、省略します。

(6) 通商口岸

次に、通商口岸です。

通商窓口のことを「通商口岸」といいます。現在、一級レベルの通商口岸は二四一カ所ありますが、一級レベルには国の承認が要ります。一級以下は省レベルの承認で十分です。

この写真（資料二四頁）を見てください。先ほど紹介した密輸の場所は、このゲートの隣です。歩いてわずか一〇分あたりのところです。そこに川がありまして、夜、中国人とベトナム人の間で密輸が行われていました。昼になると国境警備隊が歩いていますので、何もなかったようです。

この図表（資料二五頁）は、統計上の概念に区別するために図にしたものです。一番数字が小さいのが互市貿易額です。その次が辺境貿易額。辺境通商口岸貿易額が一番大きいです。なぜかといいますと、国と国の間の正式な貿易は税関を通す可能性があるからです。例えば上海のものを列車に積んでロシアに行く場合、この窓口を通せば辺境通商口岸貿易の統計に入ります。

以上、第一部で基本的な概念を紹介しました。

二、辺境（国境）経済開発における三つの局面

――存在効果・展開効果・拡散効果――

第二部は、辺境（国境）経済開発における三つの局面です。存在効果・展開効果・拡散効果に分けて説明したいと思います。

(1) 辺境物流センターによる存在効果

まず、辺境物流センターによる存在効果です。

アメリカとメキシコの間にマキラドーラという保税加工区があります。ＮＡＦＴＡがスタートす

る前から存在しています。一九六六年、メキシコ政府は、アメリカとの国境あたりの雇用を拡大するため、アメリカと協議をして保税加工区をつくりました。それがマキラドーラです。その中に会社を誘致し、輸出加工拠点をつくって地元のメキシコ人を雇用したことで、メキシコの工業化につながり、輸出戦略の一つとなって、雇用の拡大にもつながりました。非常に評価されました。当時、日本の大企業、松下、日立など一〇〇社ぐらいがそちらに進出したようです。中国の発想はもともとそれかもしれませんが、それを目指して、それ以上の大きなことをやっていると私は見ています。

国境開発の第Ⅰ局面は、「互市―物流センター」による存在効果モデル図です。まず、歴史上、互市があり、その互市につながる郷・鎮が必ずありまして、物の集積場もあります。現在は、地元の開発を生かして物流センターになり、辺境の中心都市になっています。国から承認をもらい、通商窓口になって地元の存在をアピールする、そういうモデルではないかと私は思っています。辺境に行くと、辺境の町にはまず存在効果が出てくると思います。

(2) 辺境（国境）経済合作区による展開効果

次に、局面Ⅱ、展開効果です。

経済合作区をつくって外部の資本を導入し、会社を運営させ、徐々に物流と一体化し、生産・物流などの機能を持たせて国際都市を目指す、これを私は「展開効果」と呼んでいます。

(3) 協力窓口と地域経済協力による拡散効果

さらに、局面Ⅲ、拡散効果です。

協力窓口、要は地域化経済協力による拡散効果

があるということです。これはすべての辺境都市が持つ機能ではなく、一部だけです。国際フォーラム、交流会、博覧会、観光祭など、窓口を通じていろいろな行事を開催し、国と国の間の経済協力、地域協力の役割を果たしていく重要な国境都市になる、これを拡散効果といいます。経済以外の分野にも拡散しているということです。

(4) 中露辺境町綏芬河のケース・スターディ

資料三〇頁から三三頁は綏芬河のケース・スターディです。綏芬河は中国の辺境の中でも非常に大きな町です。物の集積地が形成され、陸運、海運の運送もあって、辺境の重要な役割を果たしています。したがって、存在効果があると見ています。

この写真（資料三一頁）は、ロシア側から輸入した木材を満載するトラックの写真です。右側は検問所です。

次に、局面Ⅱ、展開効果があります。

辺境経済合作区を設立し外部資本を導入して、二〇〇八年までに三六社の企業が進出しました。下の囲みに書いたとおり、辺境町から国際都市を目指しています。これは展開効果ではないかと思います。

さらに、局面Ⅲの拡散効果を持っています。

綏芬河では、牡丹江市とハルピン市と連携し、地元政府と中央政府が組んで、「ロシア国家年」「中国国家年」などを実施したり、友好条約を調印したりするなど、戦略的なパートナーシップ関係を構築しています。したがって、国と国の間で大変重要な役割を果たしている町といえます。これを私は拡散効果と考えており、非常に評価しています。

(5) 北東アジアにおける三つの国境町への実証

この表（資料三四頁）の一番下を見てください。私はたくさんの辺境町を回りましたが、その中の三つを取り上げて、○、△、×という形で総合評価をしました。ロシアとの国境町は綏芬河、北朝鮮との国境町は琿春、モンゴルとの国境町は阿日哈沙特です。どういう場所に位置するか、地図を見てみましょう。

綏芬河は黒竜江省にあります。当時、私たち調査団は、車で中国から牡丹江市を通過してそのままウラジオストクに行きました。中国側の車です。日本でも、上海からトラックを積んで船に乗って、九州に来たらそのまま日本で走るのが理想ではないかといっていますが、それは中露間にできました。中国の車でそのまま行けるんです。また中国辺境町の満州里にはロシアの車があふれています。全部日本製で右ハンドルです。

北朝鮮との辺境町の琿春はここにあります。阿日哈沙特はここです。満州里の南西七〇キロ、モンゴルの国境あたりです。

先ほどの表に戻ります。私は、この三つの町を総合評価しました。まず、先ほど具体的に紹介した綏芬河は、存在効果は○、展開効果も○、拡散効果も○、したがって、総合評価も○です。琿春は、存在効果はもちろん○です。展開効果も○です。拡散効果については、北朝鮮の事情によって私は評価しません。したがって、トータルの評価は△です。阿日哈沙特は、存在効果は○。そこには一類通商口岸があるんですけれども、展開効果は余りない。あそこは草原が多く、人口が少ないので、私がいたところはまだまだの感じでした。地元の工業はなく、地元政府のいうとおりにはうまくいっていませんでした。モンゴル側も人口が少なくて、あそこに投資する案件が少ないようで

す。ですから、展開効果は×にしました。要は、国と国の間の協力でないと、同じ認識がないと展開効果にはなりません。したがって、トータルの効果は×です。

第二部でいいたかったことは、中国は大きいので風景はいろいろあるにもかかわらず、経済開発のパターンは、実はこの三つだけにまとめられるということです。

(6) 中国辺境（国境）地域開発から見た主要な三つの地域化国際開発協力戦略

先ほど紹介した三つの局面によって、さらに国際間協力が進められています。現在、中国には三つの主要な国際間協力地域があり、まず一つは東北地区の図門江地域、そして新疆喀什特区、三つ目は北部湾またはメコン地域です。

三、辺境（国境）貿易から見た人民元の国際化

――人民元国際化は辺境貿易から発足したが・・・

(1) 辺境貿易における人民元建て貿易決済は、人民元地域化の第一段階

次に、人民元についてお話しします。

この六年、国境地域を回ってよく感じたことは為替レートについてです。ロシア以外のところでは大体、人民元を使います。特にモンゴル、ベトナムです。モンゴルでは空港のＡＴＭから中国銀聯カードでお金を下ろせます。一言でいうと、人民元はハート通貨です。店に行くと、ドル、人民元の為替レートが表示され、あとは日本円があるかないかです。八年前、人民元は強いなと思って

いましたが、当時は人民元国際化の話は全くありませんでした。

もう一つ感じたことは、辺境貿易の決済にどんな通貨を使うかということです。みんな相手国の現地通貨は余り持ちたくありません。そうするとドルがやはり基軸通貨として使われています。ロシア側と貿易するとき、ロシア側は強気です。なぜかというと、石油、天然ガス、木材、鉄鋼など、ロシア側は資源類を中心に輸出していて、こちらは軽工業品だからです。そういう取引をするときは必ずドルです。西北のイスラム系の国、カザフスタンなどもドルですが、それ以外は基本的に人民元の場合が多いようです。

辺境貿易における人民元建て貿易決済は人民元地域化の第一段階と考えます。これまでの六年間の調査で、人民元の国際化は地域化からスタートすべきだと私は考えています。資料三九頁に（貿易は実体経済、ＨＯＴマネー流入出の防止など）と書きましたが、もう一つ目的があります。

そもそも人民元国際化の目的は何かといわれます。現在、香港のオフショアセンターで人民元を国際化しようということがブームになっているようですが、クロスボーダー貿易で中国にとってメリットが多いかというと、現実には必ずそうではありません。貿易決済額の中身を見ると、輸出はドルで支払われて、逆に、輸入は人民元のほとんどです。そうなると、中国の持っている外貨準備はますます多くなって、アメリカの国債を買わなければならない。しかし、人民元の国際化のもともとの目的は、為替のリスクをヘッジすることだと思うんです。ですから、私は、人民元の国際化は地域化からスタートすべきだと今現在でも考えています。

資料四〇頁の上段の図表は、ベトナム、モンゴ

ル、ロシア、カザフスタンとの辺境貿易におけるカレンシーの構成です。ロシア、カザフスタンはドルで、ほぼ一〇〇％に近いです。それ以外は人民元がほとんどです。相手国の通貨はゼロです。ベトナムとモンゴルは人民元かドルになっています。

(2) 金融危機前にも、中国政府はすでに辺境貿易における人民元建て決済を促進

金融危機の前にも、中国政府は既に辺境貿易における人民元建て決済を促進していました。一番下に書いてあるとおり、金融危機の後、中国人民銀行は、韓国、香港、マレーシアなどの金融当局と、総額八〇三五億元、三年間の二国間の通貨スワップ協定を結びました。このスワップ協定を締結する前、中国政府は、国境あたりの貿易のために、国境を接する国との間で中央政府と貿易カレンシー決済、要は人民元による貿易決済に関して協定を調印しました。

資料四二頁がその表です。ベトナム、モンゴル、ロシア、キルギスタン、カザフスタンです。

(3) 金融危機前、人民元による貿易決済は従来の辺境貿易ベースを越えていない

金融危機前、人民元による貿易決済は従来の辺境貿易ベースを超えていない、これは当たり前こととといわれるかもしれませんが、当時は人民元国際化という戦略はなかったからです。

(4) 二〇〇九年以降、全体の人民元建て貿易決済に占める辺境貿易の割合が急に縮小

金融危機以後、すなわち二〇〇九年以後、全体人民元建て貿易決済に占める辺境貿易の割合が急に縮小しています。その背景には、四点目にある

ように、中央政府が積極的に拡大する方針を出したことがあります。辺境貿易での人民元国際化が終わったと冒頭にいいましたけれども、その理由がこれです。

(5) 今後、人民元国際化は従来の辺境貿易における民間・自発的な市場行為を中心とした段階から、政府主導かつ全面・多様な段階になる

今後、人民元国際化は、従来の辺境貿易における民間・自発的な市場行為を中心とした段階から、政府主導かつ全面・多様な段階になります。冒頭で紹介したように、人民元の国際化は政府主導でしなければならない方向にシフトしています。ところが、いろいろ問題があります。

(6) 人民元国際化の展開図：貿易＋ＯＤＩ＋香港オフショア市場

資料四八頁は人民元国際化の展開図です。

辺境貿易の内容を超えていますので、少し紹介します。貿易＋ＯＤＩ＋香港オフショア市場です。ＯＤＩは中国から海外への直接投資の話です。まず、海外の人民元ストックを拡大していくという話です。

最後に、これからのチャンスについてです。

今、日米欧、非常に大変な時期で、これからさらに市場が冷え込んでいけば中国の輸出は激減します。産業レベルアップのために、海外ＯＤＩ、特にＭ＆Ａが増加していくだろうと見ています。そのときに中国の人民元、ドルではなく、その沢山の資本は海外に行って、海外のストックを拡大していって、先ほど紹介した人民元による貿易を含めて、人民元の海外のストックが多くなれば人

民元の国際化の場になります。しかし、今は本当にわずかです。

少し時間をオーバーしましたけれども、今日はどうもありがとうございました。（拍手）

若林常務理事　薛　軍先生、どうもありがとうございました。

中国の国境付近における貿易や経済協力の現状について、現地調査を踏まえて詳しく御説明いただいたと思います。さらに、人民元の国際化についても言及していただきました。大変興味深いお話をお聞かせいただいたと思っております。

若干お時間をいただいておりますので、ここで皆様方から、御意見、御質問等ございましたらお受けしたいと思いますが、いかがでございましょうか。

それでは、私の方から先生に質問させていただきたいと思います。

二五頁に辺境通商口岸貿易の内訳の図がございましたが、一番小さい輪が互市貿易額、次が辺境貿易額、次が辺境通商口岸貿易額となっています。先生もおっしゃいましたように、一番外側の数字が統計的に出てくるんだろうと思うんですが、互市貿易はいわば物々交換の世界ですから、統計的には出てこない。どちらかが多くなるとか少なくなるとか、いわゆる貿易収支の赤字、黒字のような概念はほとんどないのかもしれませんけれども、辺境貿易額のあたりは、国によっても違うんでしょうが、全体としては黒字になっているのか、赤字になっているのか、その辺は感覚的なところになってしまうんでしょうか。それとも、統計的にある程度押さえて分析がされているんでしょうか。その辺を教えていただければと思います。

薛　私は黒字だと思います。政府は互市の範囲を一五キロから二〇キロまで拡大して、その中で店舗を開いたり、会社、法人としての営業活動もやったりしています。先ほど紹介した辺境の局面I、存在効果ですが、存在効果があったから物流があるんです。要は、沿岸部の一部の商品を流してきて、国境の向こうの国に流していく。地元の人だけではなくて全中国の商品が来ていますので、黒字だと思います。感覚だけですがご指摘したとおり、一番小さい輪の互市貿易に関する統計がありません。

若林常務理事　ほかに御質問等ございませんでしょうか。

それでは、時間も参りましたので、これで本日の「証券セミナー」は閉会とさせていただきたいと存じます。

薛　軍先生、どうもありがとうございました。

（拍手）

（せつ　ぐん・長崎大学経済学部准教授　当研究所客員研究員）

（この講演は、平成二三年十月五日に開催されました。）

薛　　軍（SETU　GUN）氏

略　　歴

経済学博士、現在長崎大学経学部准教授、専門分野は国際投資論、アジア経済論など。1990年中国南開大学経済学部卒業後、天津市政府研究室に勤務、1992年日本一橋大学大学院経済学研究科に留学、その後オムロン（株）東京本社及び上海支社、中国社会科学院世界経済与政治研究所、佐賀大学経済学部などを経て、2008年４月より現職に至る。

近年主要著書

『中国辺境開発ビジョンとアジア地域協力―ローカルから見えてきた経済開発モデル図―』（単著、長崎大学東南アジア研究叢書、2011）

『在中国の経営現地化問題―多国籍企業現地化論の再検討―』（単著、創成社、2010）

『跨国公司全球一体化条件下的当地化戦略研究』（単著、中国人民出版社、2008）

『図説　アジアの証券市場』（共著、日本証券経済研究所、2010）

『アジア証券市場とグローバル金融危機』（共著、金融財政事情研究会、2010）

『上海経済圏と日系企業』（共著、関西大学出版部、2009）

『中国科技人力資源発展研究報告』（共著、中国科学技術出版社、2008）

『世界経済前沿問題（下）』（共著、中国社会科学文献出版社、2007）

『中国企業海外市場進入模式研究』（共著、中国経済管理出版社、2007）

『中国における国際化への課題』（共著、中央経済社、2007）

『世界経済イエローブック―2006～2007年世界経済情勢分析及び予測―』（共著、中国社会文献出版社、2007）

『中国の産学連携』（共著、新評論、2007）

『現代中国の民営中小企業』（共著、新評論、2006）、他

中国国境付近における
対外開放と地域協力の実態

長崎大学経済学部 准教授
薛　　軍（Setu Gun）

1

目次

Ⅰ. 中国の辺境（国境）経済開発

Ⅱ. 辺境（国境）経済開発における三つの局面
ーー存在効果・展開効果・拡散効果

Ⅲ. 辺境（国境）貿易から見た人民元の国際化
ーー人民元国際化は辺境貿易から発足したが…

2

Ⅰ．中国の辺境（国境）経済開発

沿岸地区　VS　沿辺地区

- 1978年からの中国の改革開放は、まず中国東部に海に面する沿岸部から開始させ、その後にだんだん内陸の西部に展開していくという戦略である。
- 東部の海に面する沿岸部である「沿海地区」に対照して、内陸にある辺境地区を「沿辺地区」と呼ぶ。

「瑷琿―騰沖人口地理分界線」

- 胡煥庸氏が1935年提出。
- 中国の人口分布は非常に差がある。当分界線の東南部地域には全国面積の43％、人口の94％を、西北部には面積の57％、人口の5.7％を、それぞれ占める。

3

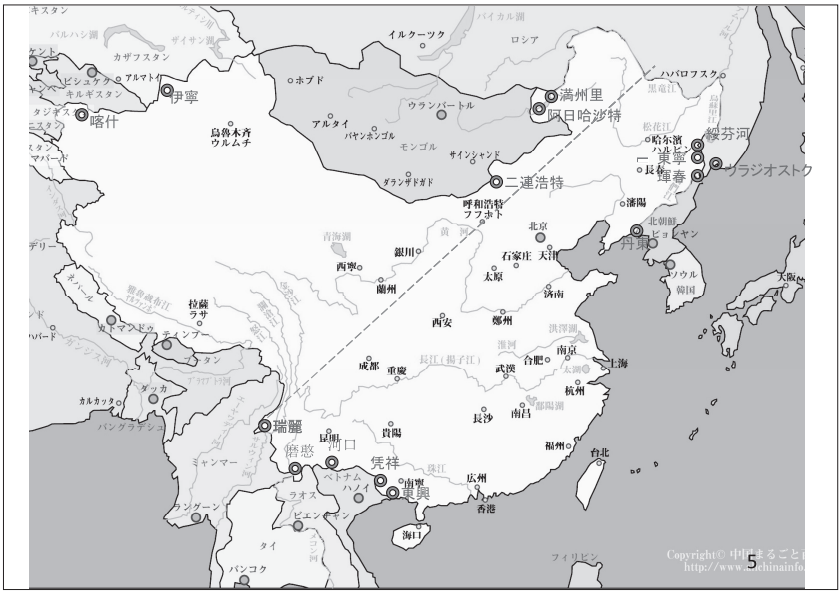
九十年代からスタート

- 1992年3月、有名な「鄧小平南方講話」とほぼ同時に、中国政府は、「沿辺地区」にある7の省又は民族自治区に、13の陸上辺境「口岸都市」、合わせて232箇所の辺境「口岸」を開放した。
- 同時に、中国政府は、沿岸部にある「経済開発区」のモデルを参考にして、上記の13の「口岸都市」に、合計13の「辺境経済合作区」を開くことを決めた。

沿岸部と比較する主な特徴

- 沿岸部の対外経済開放は、主に輸出主導による労働集約性の加工貿易生産基地を東部沿海側に建設することである。
- それに対して、沿辺部の経済開発とは、主に輸出主導による辺境貿易拠点・物流基地を辺境線の中国側に建設することである。

4



1. 辺境・国ゲート・「界碑」

- 辺境は国境とも言い、国と国の間の境である。
- 中国の国土は広いため、辺境線（国境線）は非常に長い。
- 陸上の辺境線は、東北の遼寧省丹東市にある鴨緑江（中国と北朝鮮の辺境を流れる川）から、南西の広西チワン族自治区防城港市東興にある北侖河（中国とベトナムの辺境を流れる川）まで、延長合計2.2万キロである。
- この長い陸上辺境線に沿って、それぞれ北朝鮮、ロシア、モンゴル、カザフスタン、キルギスタン、タジキスタン、アフガニスタン、パキスタン、インド、ネパール、ブータン、ミャンマー、ラオス、ベトナムの14の国々と接する。

6

- 全中国32の省レベル行政区の中に9つの省（自治区）がこの2.2万キロの長い辺境線に沿って立地し、
- また同時にそれらの下に管轄されている135の県（自治県、旗、市）レベルの行政区があり、現在の合計総人口は2200万人以上に上る。

7

国ゲート・「界碑」

- 現在、中国と隣国との間には、陸上での辺境線が明確に確定されている（インドとの一部を除く）。
- その重要なスポットにおいて、人や貨物などの出入り用の国ゲート（写真1－1参照）が作られていて、
- また辺境線を象徴する「界碑」（標識）（写真1－2参照）があちこちに立てられている。

8

写真1-1　中国ミャンマーの辺境線における国ゲートの１つ
（2007年9月雲南省の瑞麗で撮影）

注：この国ゲートは普通辺境住民たちが出入りする専用ゲート。奥の方にミャンマー語で書かれたものはミャンマー側の国ゲートである。

筆者が観察したところ、このゲートを通過する中国国籍またはミャンマー国籍の地元人及びその持っている荷物に対して、出国・入国の検問がされてなかったようである。[9]

写真1－2　中国ロシアの辺境線における「界碑」
（2006年8月中国内モンゴルの満洲里で撮影）

[10]

- また、中国と周辺国の一部との間には、通常の辺境住民はもちろん、一般の旅行者でもパスポートが要らない場合もある。
- 2007年9月、筆者が中国雲南省の瑞麗から隣のミャンマーに行った時には、普通のパスポートが不要で、代わりに地元の瑞麗公安局に行って、すぐに発行してくれた辺境出入通過許可証でした（写真1ー3参照）。

11

写真1ー3
通常の中国パスポートと同一視されている「辺境出入許可証」

12

2. 辺境と民族

- 中国の陸上での2.2万キロあまりの長い辺境線の内に、1.9万キロ、即ち86.4%の部分が少数民族地域である。
- またその内、30以上の民族は、隣の国の民族と同一民族である。
- よって、それらの辺境住民にとって、辺境線があるにもかかわらず、国籍だけが違い、ほかでの生活習慣や言葉、宗教などがほぼ一致し、またその一部には親戚関係もある（写真1－4参照）。

13

写真1－4　中国ベトナムの辺境貿易拠点（互市）に働いている中国チワン族女性
（2008年3月中国広西チワン族自治区凭祥市の浦寨互市で撮影）

14

- 現在、前述したように2.2万キロと言われる長い辺境線に、9つの省（自治区）、135の県（自治県、旗、市）レベルの行政セクターがあり、人口2200万人以上もいる。
- そのうち、民族自治県（旗）は、107ある。
- また、中国の56の少数民族のうち大半が辺境辺りに住んでおり、辺境全人口の半分近くに達する。

15

３．辺境線に点在する互市（貿易）

- 互市は中国語であり、イチバの意味であり、もともと辺境住民たちが自発的に設けた商品交換の場からスタートしたものであろう。
- 中国歴史上での互市とは、中央王朝と周辺国または異民族との間での貿易を指し、また「通商」或いは「通市」とも言う。
- 漢王朝の初期に、南越と匈奴の互市貿易が始まり、辺境あたりに互市市場を設けていた。隋・唐の時代になると、互市の管理役を設立して、辺境あたりの互市市場をコントロールしていた。
- 歴代の王朝は、その繁栄または衰退に伴って、中央と外での貿易交流を緩めたり、厳しくしたりしていた。

16

- 現代中国の互市は、歴史上残された伝統なイチバが多い。
- 互市での取引は、互市貿易とも言え、辺境住民たちが隣の国の住民たちとの間での貿易活動を指す。
- 具体的な辺境住民における互市貿易の概念とは、中国政府の規定による陸上ボーダーの領域は20キロ以内（1996年以前は15キロ以内と定めた）、政府承認済みで、開いているスポットまたは指定されるイチバという範囲にある。
- また、その互市貿易活動は、一定の金額または数量が制限される商品交換の活動である。

17

写真1-5：ベトナムと隣接する中国側の互市
（2008年3月広西チワン族自治区凭祥市の浦寨互市で撮影）

18

- 現在、互市で活躍している参加者は、もはや辺境住民だけではなく、いろんな人々や企業の姿が現れる。
- それは、すでに従来の互市貿易の範囲を超えて、もはや辺境貿易の領域にある。
- そこで、中国政府は、互市に参加するプレーヤーについて、次のことを明記している。即ち、互市貿易の参加者主体は、当該地域にある辺境両サイドの住民である。互市に進出する店舗や企業などは、辺境貿易の取り扱い対象になるのである。
- さらに、互市貿易活動に金額の制限がある。1996年公布された規定では、1人1日あたりに持ち込まれる商品の価値が、5000元を超える場合には、輸出入貨物の通関手続きが必要であり、それに関わる関税が課せられる。また、2008年11月から、中国国務院は、この従来の5000元の免税ラインを8000元までにアップさせた

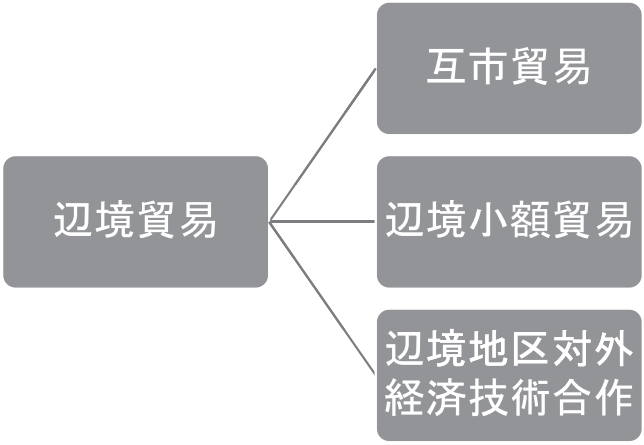
19

4. 辺境貿易

- 辺境貿易（Border Trade、国境貿易とも称する)とは、文字通りで理解すれば、隣接する両国の間に行われる貿易であろう。
- 中国国内に「辺貿」とも称され、言葉通り、辺境と貿易の二つの中身から構成されている。
- 現在中国国内では、一般的に辺境貿易の定義を、辺境あたりで一定の地域範囲の中で、辺境住民または企業と、その隣国の住民または企業との間での貿易活動を指す。
- 図1に示したように、辺境貿易は、上記の互市貿易の範囲より広く、それ以外に、辺境小額貿易と辺境地区対外経済技術合作も含む。

20

図1　中国辺境貿易の範囲



21

辺境小額貿易と辺境地区対外経済技術合作

- また、辺境小額貿易は、辺境あたりの中国企業が、隣接の国の企業との間で行われる小額の国際貿易である。
- 辺境小額貿易の特徴と言えば、互市で行われる純粋な民間貿易より、辺境あたりに法人資格を持つ民間企業で行われる貿易活動ではないかと思われる。
- 辺境貿易の中身には辺境地区対外経済技術合作という内容も含まれている。ここでの対外経済技術合作とは、海外展開する際に進出先の建設プロジェクトの受注や中国人労働力の海外派遣などを指す。

22

5. 通商口岸

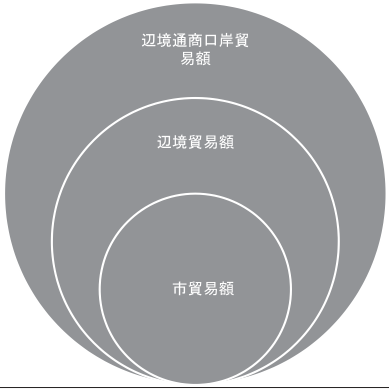
- 「通商口岸」とは、また「口岸」とも言い、中国語であり、言葉通りで解釈すれば、「口」は陸上の辺境線での窓口で、「岸」は沿岸または河川側での対外開放窓口で、両方を合わして対外オープンの通過出入口または物流・貿易の場として、中国政府に正式に指定・設立されているところである。
- 通商口岸は、陸上での窓口のみならず、空路と水路及び海の沿岸の港も指し、すなわち陸上通商口岸、港通商口岸と航空通商口岸の三種類がある。現在まで、中国全土では、オープンされた一級レベルの辺境「通商口岸」が241ヶ所ある。
- 中国政府は通商口岸の重要度によって、一類通商口岸と二類通商口岸の2つのレベルに分けている。
- 陸上に開放された辺境通商口岸も一類辺境通商口岸と二類辺境通商口岸に分けて、一類辺境通商口岸が中央政府の国務院に承認されたものであるのに対して、二類辺境通商口岸は省（自治区）レベルの地方政府に承認される必要がある。

23

写真1-6：ベトナムと接する中国一類辺境通商口岸の広西チワン族自治区東興口岸（2008年3月撮影）

辺境通商口岸貿易と辺境貿易の区別

- ところが、辺境通商口岸を通す貿易量は、必ずしも辺境貿易のものになっていない。すわなち、辺境に立地している通商口岸は、もちろん辺境ローカルの貿易機能を果たしているが、国家貿易の窓口としての役割も担当している。彼らの関係は、次の図2で示した。
- 図2　辺境通商口岸貿易の内訳



25

Ⅱ.

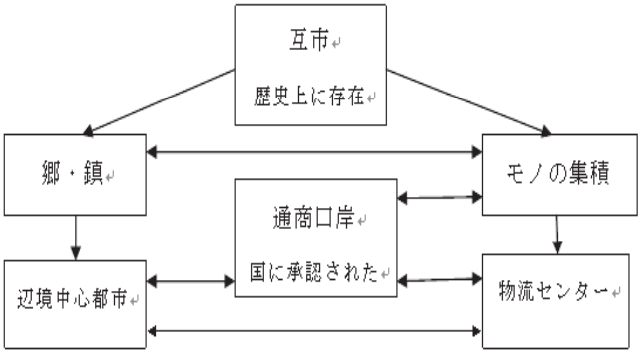
辺境（国境）経済開発における三つの局面

――存在効果・展開効果・拡散効果――

26

1　辺境物流センターによる存在効果

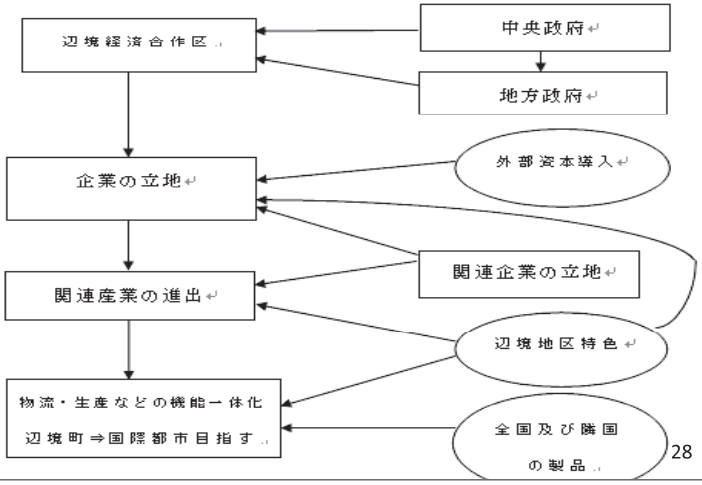
辺境経済開発の局面Ⅰ：
「互市―物流センター」による存在効果モデル図



27

2　辺境（国境）経済合作区による展開効果

辺境経済開発の局面Ⅱ：
「資本誘致―辺境経済合作区」による展開効果モデル図

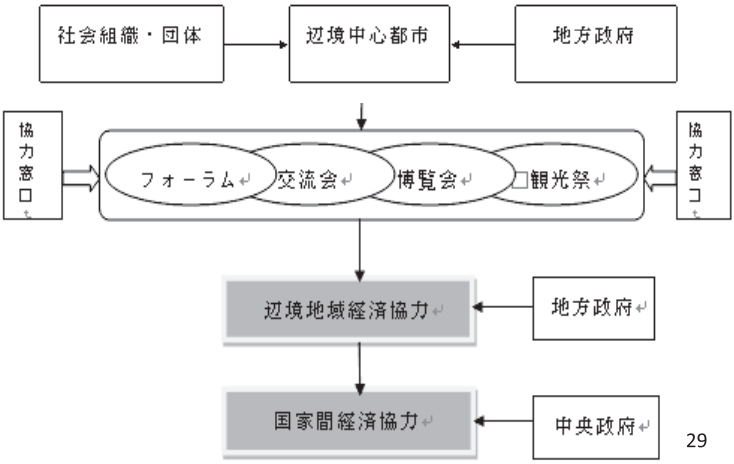


28

3　協力窓口と地域経済協力による拡散効果

辺境経済開発の局面Ⅲ:

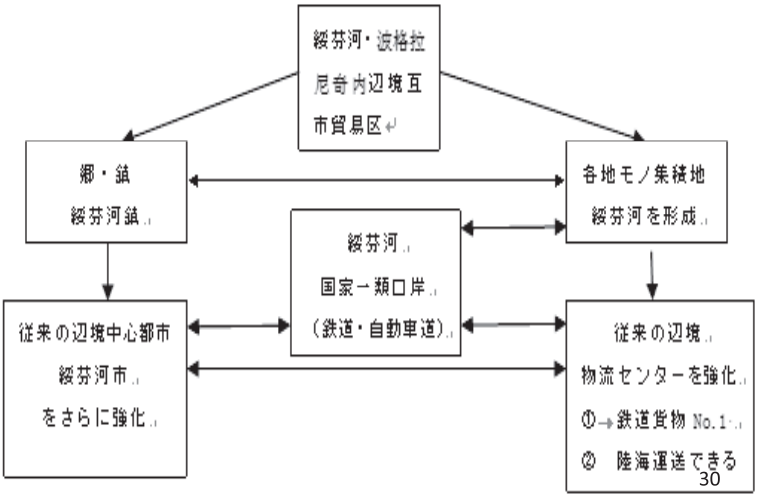
「協力窓口—地域化経済協力」による拡散効果モデル図



29

中露辺境町綏芬河のケース・スターディ

局面Ⅰ:「互市——物流センター」モデル図による存在効果

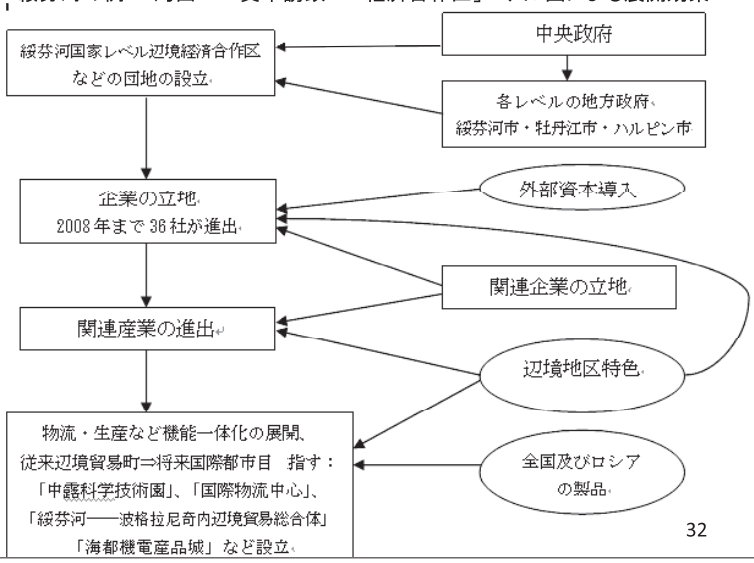


30

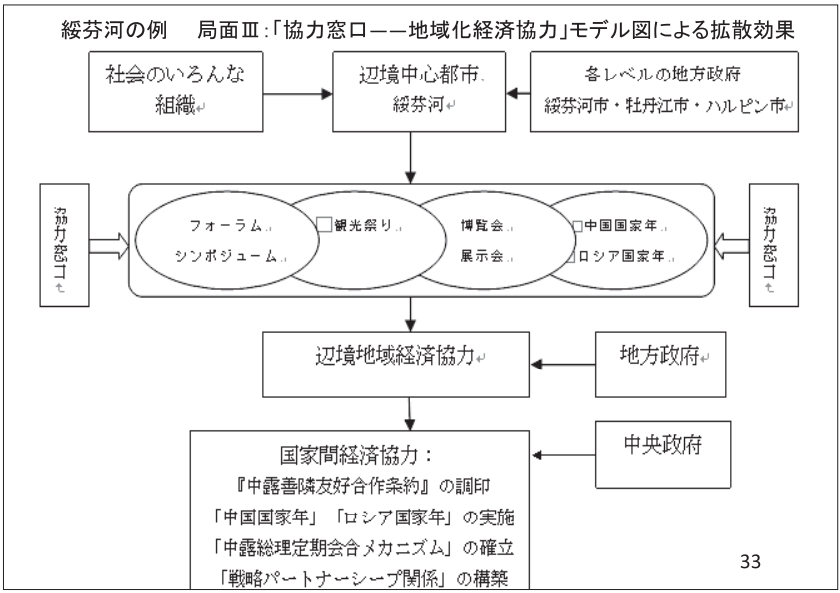
左写真　辺境町綏芬河から出たロシア側から輸入した木材を満載するトラック（2010年3月撮影）
右写真　綏芬河口岸とつながるロシア側の検問所（2010年3月撮影）

31

綏芬河の例　局面Ⅱ:「資本誘致――経済合作区」モデル図による展開効果



32



北東アジアにおける3つの国境町への実証:
中露辺境町綏芬河、中朝辺境町琿春、中蒙辺境町阿日哈沙特

3つの辺境町ケース分析に対する総合評価

ケース分析の辺境町		綏芬河	琿春	阿日哈沙特
中国側の位置		黒竜江牡丹江市	吉林省延辺朝鮮族自治州	内モンゴル自治区呼倫貝爾市新巴爾虎右旗
隣国側の位置		ロシア極東地区のウスリースク	ロシア極東地区、北朝鮮の西北地域	モンゴル国東方省のハビルガ
通商口岸の種類		国家陸上一類	国家陸上一類	国家陸上一類
国際間の鉄道の通過		あり	あり	なし
歴史上の伝統な互市		あり	あり	あり
1990年以後に設立された「互市貿易区」		あり	あり	なし
国家レベルの辺境経済合作区		あり	あり	なし
各局面に対する評価	存在効果	○	○	○
	展開効果	○	○	△
	拡散効果	○	△	×
総合評価		○	△	×

34

3つのケース・スターディに対するコメント

- 表に示されたとおり、まず、中露辺境町の綏芬河は、辺境経済開発での3つの局面共に推し進めていて、大変評価されると考えている。
- また、中露朝辺境町の琿春は、辺境経済開発における「存在効果」と「展開効果」に関しては大いに評価できるが、局面Ⅲの「拡散効果」の点で朝鮮半島などの事情の原因で、あまり前進できていないという問題もある。
- さらに、中蒙辺境町の阿日哈沙特には、まだ辺境経済開発の局面Ⅰである「存在効果」に止まっていて、局面Ⅱの「展開効果」及び局面Ⅲの「拡散効果」に移行する切り口を模索中と指摘する。

- **注釈：表には、○はよく評価できる、△は問題あるがまあまあ評価できる、×は評価できない。**

35

中国辺境（国境）地域開発から見た主要な3つの地域化国際開発協力戦略

中国の長い辺境線は、14カ国と接する。中国の沿辺地域開放政策によって、それぞれの間にまず従来の互市貿易を通じて、辺境経済合作区を立ち上げ、辺境地域周辺での辺境貿易に力を入れる。

同時に、辺境中心都市を中心に、辺境地域間での国際経済協力が推進される。その際、地方政府や民間組織が主催している交流会、シンポジューム、展示会、博覧会、観光祭などの国際イベントが盛んに開催される。

また、中央政府は、この当該地域開発の成果を生かして、更なる展開を目指している。それは、地域化国際間協力である。

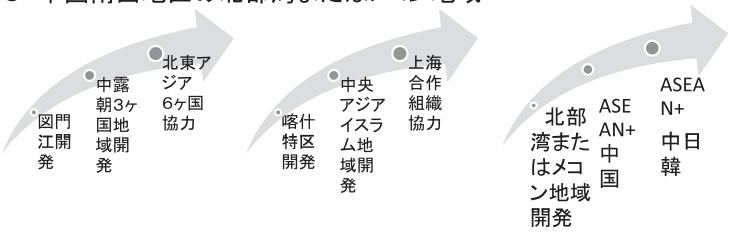
この地域化国際間協力は、いろんな形態の辺境協力ゾーンに基づいて設けられているため、すでに従来の経済開発の範囲を超え、文化交流や政治協議などの内容も含まれている。

36

現在、中国では主に3つの主要な国際間協力地域がある。

また、この3つの地域を中心にそれぞれの国際間協力が推し進められて、さらにこれらのそれぞれの地域において、中国政府はWin-Win式という原則に基づいて、当該地域の周辺諸国と連携して、さらなる大きな目標を目指しているようである。

1　中国東北地区の図門江地域
2　中国西北地区の新疆喀什特区
3　中国南西地区の北部湾またはメコン地域



37

Ⅲ.
辺境（国境）貿易から見た人民元の国際化
――人民元国際化は辺境貿易から発足したが…

38

1. 辺境貿易における人民元建て貿易決済は、人民元地域化の第一段階である。

- これまでの6年間の辺境地域現地調査によって、人民元の国際化は、地域化からスタートすべきだと考えている

（貿易は実体経済、HOTマネー流入出の防止など。）

- にもかかわらず、人民元の地域化もプロセスが必要である。人民元の地域化の突破口は、辺境貿易であり、すなわち、人民元の辺境貿易化である。

39

2009年一部周辺国との辺境貿易におけるカレンシーの構成（%）

	ハードカレンシー	人民元	相手国カレンシー
ベトナム	10.1	89.0	0
モンゴル	33.5	66.5	0
ロシア	98.9	0.2	0.9
カザフスタン	100.0	0	0

資料：中国人民銀行ウルムチ中心支行課題組

一部周辺国との辺境貿易における人民元による貿易代金の割合（%）

	2004年	2005年
中国・ベトナム	81	85
中国・モンゴル	90	94
中国・北朝鮮	45	50
中国・ロシア	15	18

出所：2004年のデーターは鐘国瞬（2008）により、2005年のデーターは庞鐳（2008）により整理。

40

2. 金融危機前にも、中国政府はすでに辺境貿易における人民元建て決済を促進していた

- 20世紀 90年代に、中国は既に辺境貿易の際に、人民元による決済が行われていた。
- 1997年、国家外貨管理局が『辺境貿易外貨管理暫定弁法』を公布。
- 通貨スワップを締結した前（金融危機の前）、中国の人民銀行は一部周辺国の中央銀行との間に、辺境貿易カレンシー決済、即ち人民元による貿易決済に関して、協定を調印(8カ国)。

- ちなみに、中国人民銀行は、2008年12月から（金融危機の後）、韓国、香港、マレーシア、ベラルーシ、インドネシア、アルゼンチン、アイスランド、シンガポールなどの中央金融当局と、総額8035億元、3年間の「二国間通貨スワップ協定」を締結。

41

金融危機前、辺境貿易カレンシー決済に関する中国と一部周辺国との協定

国別	協定名	調印時期	辺境貿易決済時の通貨	備考
ベトナム	『中国人民銀行・ベトナム国家銀行が決済と合作に関する協定』	1993.5	両国の通貨	
モンゴル	『中国人民銀行・モンゴル銀行が支払と決済に関する協定』	2004.7.5	両国の通貨	有効期限3年、自動延期可能、サービス貿易を含む
ロシア	『中国人民銀行・ロシア連邦中央銀行が辺境地区貿易での銀行決済に関する協定』 『上記に関する紀要』	2002.8.22 2004.9.24	両国の通貨	一部辺境地域のみ、双方の異議がなければ有効になる。 適応範囲はすべての辺境地域に拡大
キルギス	『中国人民銀行・キルギス国家銀行が両国での支払と決済に関する協定』	2003.12.18	両国の通貨	有効期限3年、自動延期可能、サービス貿易を含む
カザフスタン	『中国人民銀行・カザフスタン国家銀行が辺境地区貿易での銀行決済に関する協定』	2005.12.14	両国の通貨	有効期限3年、自動延期可能

42

3. 金融危機前、人民元による貿易決済は従来の辺境貿易ベースを越えていない

- 以前、辺境貿易における元建て総額は、中国全体貿易における元建て総額と同一視と考えている。
- よって、人民元建ての貿易決済額での比率を計算する場合には、中国の全体貿易輸出入総額を辺境貿易での元建て総額で割れば、その結果が実際の数字に一番近い。表に示されたように、筆者は、李婧等（2004）が推算した中国辺境貿易での元建て総額のデーターを利用して、1994～2003年の10年間、中国の貿易における人民元建て比率を計算した。

43

中国の貿易における人民元建て比率についての推計

単位：億人民元、％

	輸出入総額	うち、辺境貿易における元建て総額	占め率
1994	20381.9	3.7	0.02%
1995	23499.9	2.84	0.01%
1996	24133.8	8.33	0.03%
1997	26967.2	15.62	0.06%
1998	26849.7	16.67	0.06%
1999	29896.2	130.19	0.44%
2000	39273.2	188.98	0.48%
2001	42183.6	170.72	0.40%
2002	51378.2	235.77	0.46%
2003	70483.5	321.9	0.46%

出所：輸出入総額は『中国統計年鑑2008』に、辺境貿易における人民元建ての決済総額は李婧など（2004）により。

44

- 表に示されたこの10年間の推移を見ると、次の二つのことがわかった。
- 第一、1995年、2000年及び2001年を除いて、中国の貿易における人民元建て比率は、基本的に毎年上昇している傾向があると確認できた。
- 第二、中国の貿易における人民元建て比率は一番高い年の2000年でも0.48％のみ、あまり低すぎるため、中国人民元の国際化はまだ低い初期段階にとどまっていたと再度確認できた。
- ちなみに、日本の場合、輸出における円建て比率は、1970年時点のわずか１％から５年後の1975年18％、10年後1980年の29％、15年後プラザ合意の1985年の36％までに、急速伸びていた

45

4. 2009年以後、全体人民元建て貿易決済における辺境貿易の割合が急に縮小している。

その背景は

- 二カ国通貨スワップ協定の締結
- 2009年4月8日、中国国務院は、人民元建て貿易決済の実験区として、上海、広州、深セン、珠海、東莞の5つの都市を指定した。また、2010年6月24日に、中国政府は上記の実験区を5つの都市から20の省（直轄市・自治区）までに拡大させた。その20の省（直轄市・自治区）は各々、北京、天津、内モンゴル、遼寧、上海、江蘇、浙江、福建、山東、湖北、広東、広西、海南、重慶、四川、雲南、吉林、黒竜江、チベット、新疆である。また同時に、人民元の中国本土以外での取り扱い範囲については、香港、マカオ、ASEANから指定しないこととした。
- 2009年7月19日、人民銀行と香港金融管理局による新たな清算協定が設けられ、個人・会社の銀行間の業務が自由になった。よって、香港での人民元ストックは急激上昇。
- 2009年7月、中国政府は香港の海外オフショアセンターの位置を明確。従来の貿易決済の機能を大幅に超え、人民元国際化に関するいろんな機能を持つことになる。

46

5. 今後、人民元国際化は従来の辺境貿易における民間・自発的な市場行為を中心とした段階から、政府主導且つ全面・多様な段階になる

- 人民元地域化の最初の段階は、辺境貿易化を通じて、人民元の中国周辺化と考えられる。またこの段階でのもう1つ重要な特徴は、市場主導であり、即ち、中国と周辺国との経済交流に伴う自然的に発生・形成した市場行為である。
- 現在、政府主導であることが必要と考えられる。政府主導による人民元の国際化は、人民元地域化の第2段階での新たな局面に入っている。この段階では、中国政府がこれまでに、次の2つの施策を採用した。
- 第一に、香港を人民元の東アジア、ひいては世界に進出する窓口にすること。即ち、人民元の海外オフショア市場などを積極的に推進していく。
- 第二に、辺境貿易を含め、世界各国との貿易における人民元決済をスタート促進させること。クロスボーダー貿易における人民元建て決済の実験は、辺境地域から必要である。同時に中国本土以外での人民元の流通と取引に関するシステム構築も周辺国から進めることが合理的である。

47

6. 人民元国際化の展開図：貿易+ODI+香港オフショア市場

- 貿易の場合では、2009年はまだ全貿易額2.2兆＄の1%、2010年は3兆＄⇒5%＝1500億＄に相当する人民元になれば…
- ODIの場合では、2010年中国のFDIは1054億＄、ODIはその半分。仮にODI=FDI=1000億＄に達したら…
- 香港オフショア市場では、いろんな機能を持たされ、大きい役割を発揮できる。（銀行の預金・送金・両替、貿易決済、ODI、貿易融資、ファンド、いろんな形及び期間の債券、IPO、近い将来小QFIIも考えられる）
- ちなみに、2009年中国の356億＄ODIの70%は香港向け、又は香港経由が海外に流出。

48

これまでに人民元建てによる辺境ODIが少ないが、今後中国周辺国をはじめ人民元による投資ルートの開拓が増えていくと予測

- 中国資本の海外進出は国策（2011・1人民銀行1号文）。
  人民元によるODIの急増が期待できる。
- 2010年中国のFDIは1054億＄、ODIはその半分。
  仮にODI=FDI=1000億＄、海外ストックは大きくなる。人民元の国際化に大いに貢献できる。
- 海外ストックは大きくなる可能性が十分ある。
  今後、日米欧市場がさらに冷え込んでいけば、中国の輸出激減⇒産業レベルアップのために海外ODI特にM&Aが増加する見込みがある。
  また中国一人当たりGDPが5000＄台に来て、ODIに有利な局面になっている。

J．H．ダニングの投資発展段階理論

経済発展段階	FDI流入	FDI流出
第１段階：400ドル以下／１人当たりGDP	低	低
第２段階：400～2000ドル／１人当たりGDP	増加	低
第３段階：2000～4750ドル／１人当たりGDP	増加	増加
第４段階：4750ドル以上／１人当たりGDP	減少	増加

49